



獣害対策として電気柵は効果的な対策の一つです。冬期間は農作物も少なく、管理がおろそかになりがちです。効果的に電気柵を運用するために次の所を定期的に点検しましょう。

1 電気柵本器(電源ユニット)の動作確認

まずは、本器自体が故障していないか確認してください。

①電源を確認。

電源がつながっているか、電池やバッテリーが切れていないか確認しましょう。

②取扱説明書にしたがい、本器の動作確認を行ってください。

専用テスターをあてて、正常に電圧数値が出ていれば本器は正常です。電圧を検知できないようであれば、修理が必要となります。

2 アースの確認

地電気柵のアースは、非常に重要な役割を果たしています。

もし、アースが設置不良だと本機が正常に稼働しても、電圧が上がらずイノシシなど獣に与えるショックが小さくなってしまいます。

①アース線が切断、あるいは抜けていないか。

②アース棒が地中に隠れるまで埋設しているか。または必要本数が全て埋設されているか。

③アース棒が古くて錆びていないか。

などをしっかり確認してください。

アース棒が錆びると電流の流れが悪くなります。錆びていたり、折れていたりしたら交換しましょう。

3 漏電箇所の確認

電牧線が金属や植物、地面に触れていませんか。漏電箇所がどこであっても電気柵全体の電圧が下がってしまうので、漏電箇所をなくしましょう。

4 電牧線のショートに注意

電牧線に焦げている箇所があったり、パチパチ音がするのは、ショートが原因です。

結び目が原因で電牧線がショートし、熱によってナイロン線と鉄線が溶けて、断線してしまうことがあります。結び目をぐるぐる巻きにしたり、こぶ結びをいくつも作ったり、線の余り部分を垂らしたままにするとショートは起きやすくなります(写真1)。

ショートが起きているかどうかは、火花が散ってい

る音の有無でわかります。「パチッ！パチッ！」と音がしていたら注意深く耳を澄まして、ショートしている場所を探しましょう。



5 電牧線のたるみ、断線に注意

電牧線がたるんだり断線していると、隙間から動物が入りやすくなります。また、地面や水たまりに触れると漏電の原因になります。

電牧線は必ずピンと張りましょう。

特に最下段の線はこまめに確認しましょう。

6 積雪時の管理

電牧線が雪に触れると漏電するため、動物が電牧線に触れても感電しません。また雪の重みにより電牧線を押し下げため、たるみや断線が生じやすくなります。そこで、積雪期には柵線を巻き取る、または積雪前に地面にまとめて下ろします。



7 部材の交換・管理

電牧線は紫外線や風雪により劣化し電圧が低下するので、7年程度で更新が必要です。

ソーラー電源の場合、4～5年で内蔵バッテリーを交換します。

自動車用バッテリーの場合、バッテリー液が減っていたら、精製水(またはバッテリー用補充液)を補充しましょう。なお、一般的なバッテリーの寿命は2～5年です。

8 注意表示板の掲示

電気柵を設置する場合は、危険を知らせる注意表示板を目立つ位置に設置して下さい。

農畜産課 農畜産係(清水)